

春陽会選抜新人展

二月三日~八日 於・日本橋高島屋 八階ホール

〔案内状〕

拝啓 寒冷の候愈々ご健勝の御事と賀し上げます

扱この度 春陽会新人中より左記五名の新鋭作家を選抜 展覧会を開催  
いたすこととなりました

御高覧賜りたく御案内申上げます

出品作家(五十音順)

安谷屋 正義 一九二二年生(那覇)、東京都豊島区西巢鴨在住、東京美術学校卒。

荒木 市三 一九二三年生(三重)、東京都豊島区要町在住、川端画学校、春陽会

研究会出身。

五味 秀夫 一九二二年生(東京)、東京都千代田区神田駿河台在住、東京美術学

校卒、第一回シエル賞展出品。

田畔 司朗 一九一七年生(茨城)、東京都足立区千住柳町在住、東京美術学校卒、

第二回シエル賞展出品。

宮城 音蔵 一九二二年生(東京)、東京都練馬区上石神井在住、武蔵野美術学校

卒、第二回シエル賞展出品。

昭和三十四年二月

春陽会

〔春陽会選抜新人展 出品録〕(総点数 四十点)

○安谷屋 正義

・塔(40 M)、珊瑚礁(40 M)、孤影(40 M)、廢船(40 M)、塔(30 M)、飛  
翔(30 M)、那覇港(30 M)——七点。

○荒木 市三

・布と裸婦(50 F)、布と裸婦(30 F)、布と裸婦(20 F)、布と裸婦(40 F)、  
鏡と裸婦(40 F)、鏡と裸婦(30 F)、酒を呑む男達(40 P)、酒を呑む男  
達(20 F)、酒を呑む男(12 P)、裸婦(20 P)——十点。

○五味 秀夫

・黄色の蝶(30 F)、氷裂(30 F)、蝶の墓場(80 M)、黒い月(30 P)、捕わ  
れた蝶(20変)、日没の塔(30 P)、蝶の柱(40 P)、異次元の影(30 P)、  
霧の森(20 P)——九点。

○田畔 司朗

・鎧と馬(100 F)、バラード(100 F)、昇天(100 F)、魚(100 F)、蟹(50 F)、  
黒い鳥(50 F)——六点。

○宮城 音蔵

・船(120 P)、船(100 P)、船(100 F)、船(30 P)、船(80 P)、船(40 F)、  
船(50 P)、船(40 M)——八点。

## 〔展覧会評〕

二つの新人展 「春陽会選抜新人展」「集団30選」

春陽会が出品作家から選んだ新人五人、安谷屋正義、荒木市三、五味秀夫、田畔司朗、宮城音蔵の作品四十点を並べている「春陽会選抜新人展」と、アンデパンダン展の出品作家三十人によって結成された「集団30選」の五十五点がいろいろと対照的でおもしろい。春陽会の新人ではガイ骨の踊りをモチーフにした田畔、船の連作の宮城、蝶や蛾を描いた五味など、それぞれ特異な素材を幻想的につつこんで個性のある叙情性にまで盛り上げている。また田畔は灰緑、宮城は朱と黒、五味はコバルトと色彩もうまくこなしている。

集団30の方は、会員も多いせいか、やや玉石混交の気味であり、ほとんどが抽象系の作家なのでどうしても類型化し、わずかに、治田武、梅沢啓子の熱っぽい激しいタッチに若い画家らしい意欲と、朝倉響子の彫刻の要約した量感が感じられる程度である。

ところでこの二つの新人展がどのように対照的なのかだが、春陽会のほうはいままでもなく団体そだちであり、集団30はアンデパンダンから出てきた(全部がそうではないが)、作家たちという組織へのからまり方がちがう。アンデパンダンは、いわゆる美術団体が既成作家の政治的な場所があつて、そうしたボスの支配下にあつては芸術は成長しないという点で自由

出品(アンデパンダン)制のショーにたよつたのである。だが結果はどうだったか。集団30の主要メンバーである利根山光人、加藤正など文字どおりアンデパンダン作家だが、彼らと春陽会の新人田畔や宮城とくらべると、利根山、加藤の沈滞は考えさせられる。美術団体の政治制は非難されよう。だがそこがコントロールの場であることまでは否定できない。

そして田畔たちはその場から伸びてきた。美術団体を弁護しようなどというのではなく、芸術にあつて自由というものは間違つと不毛に通ずる、という昔ながらの真理をこの二展を見くらべて考えさせられたまでである。それにしても、春陽会が積極的に新人にデビューの場所を作ろう——この試みは来年も続けられるそうである——という態度はいい。美術団体の本質はこうしたところにあるのだ。

(船戸洪吉)

\*春陽会選抜新人展は東京日本橋高島屋、集団30展は渋谷東横、いずれも八日まで。

『毎日新聞』 昭和三十四年二月五日

